

高齢者施設における「死の教育」実践に関する基礎的研究  
—介護職員に対する死生観実態調査をもとに—

河村 諒・澤田景子・伊東眞理子（同朋大学大学院）

【背景・目的】

近年、平均寿命が延び、それに伴い後期高齢者の割合が増加していることが言われている（厚生統計協会, 2004）。また、政府統計（2009）における死亡場所についての調査では、介護老人保健施設での死亡割合が、1995年では全体の0.2%、老人ホーム（特別養護老人ホーム・養護老人ホーム等）での死亡割合が全体の1.5%であったのに対し、2008年ではそれぞれ1.0%、2.9%と増加している。このようなことから、今後、高齢者施設ではたらく介護職員による終末期ケアや看取りが増加することが予想される。

医師が少ない高齢者介護施設では、介護職員の死生観が終末期ケアの質に影響を与えることがいわれている（平川・葛谷・加藤・植村, 2008）。また、死と向きあう介護においては、ケアの技術的な側面だけではなく死生観のあり方も重要になるという指摘がなされている（広井, 2005）。しかし、介護職員の養成教育の中では、死の教育の学習機会や教育時間が不十分であることが指摘されており（早坂, 2010; 牧・石井・野村, 2006）、教育カリキュラム上でも内容的に不十分であることが指摘されている（榊原・中家, 2008）。また、ターミナルケアや看取りについての研修を必要と考える高齢者施設の介護職員は75%であったという調査結果（早坂, 2010）の一方で、特別養護老人ホームの職員117名中、施設での死に関する教育を受けたのは4名のみであったという調査結果が示されている（早瀬・岡田・門森・島崎・半田, 2007）。すなわち、介護職員養成の教育においても、介護職員の研修においても、死に関する教育は重要かつ必要であるにも関わらず、カリキュラムの内容が不十分であるという問題や研修の遅れという問題が指摘されている。

従って、より充実した死の教育のために、特に死生観に焦点を当てた資料の蓄積が必要であると考えられる。そこで、本研究では、有料老人ホームや老人保健施設といった高齢者施設の介護職員の死生観について実態調査を行い、死生観に焦点を当てた死の教育のための基礎的資料を示すことを目的とした。

【方法】

1. 対象及び手続き

愛知県の有料老人ホーム、及び、老人保健施設3施設の介護職員131名を対象に、質問紙調査を行い、107名の有効回答が得られた（回収率81.7%）。調査実施期間は2012年5月～6月であった。倫理的配慮として、調査依頼状、及び、質問紙において、回答者への倫理的配慮に関する記載（回答が調査対象者の自由意志に基づくものであること等）を明記し、無記名回答による回答者の匿名性の保証、個人のプライバシーを保護した。

2. 調査内容

## 1) 基本属性

基本属性として、年齢、性別、介護職の経験年数、職場での看取り経験の有無（「1. あり」、「2. なし」）、家族や身内の看取り経験の有無（「1. あり」、「2. なし」）、死の教育を受けた経験の有無（「1. あり」、「2. なし」）、介護資格の有無（「1. あり」、「0. なし」）について尋ねた。

## 2) 死生観

平井ら（2000）の死生観尺度を使用した。この尺度は 27 項目からなり、上位概念と各項目内容は、①死後の世界観 4 項目（「死後の世界はあると思う」等）、②死への恐怖・不安 4 項目（「死ぬことがこわい」等）、③解放としての死 4 項目（「私は、死とはこの世の苦しみから解放されることだと思っている」等）、④死からの回避 4 項目（「私は死について考えることを避けている」等）、⑤人生における目的意識 4 項目（「私は人生にはっきりとした使命と目的を見出している」等）、⑥死への関心 4 項目（「自分の死について考えることがよくある」等）、⑦寿命観 3 項目（「寿命は最初から決まっていると思う」等）である。回答は「1. 当てはまらない」～「7. 当てはまる」の 7 件法である。なお、この尺度はすべての因子の総得点を求め、死生観というひとつの変数として機能するものではなく、各因子の特徴から全体としての死生観を把握するものである。

## 【結果】

### 1. 基本属性について

対象者は、男性 21 名（26.6±3.5 歳）、女性 86 名（34.5±11.5 歳）の合計 107 名（32.9±10.9 歳）であった。介護職の経験年数については、男性が 3.3±2.6 年、女性が 5.2±4.3 年であった。介護職場における看取り経験の有無、家族や身内における看取り経験の有無、死に関する教育を受けた経験の有無、福祉に関する資格の有無については表 1. に示す。

表1 対象者の基本属性

基本属性	度数または平均値
性別(人数)	男性 21
	女性 86
年齢(歳)	男性 26.6±3.5
	女性 34.5±11.5
	合計 32.9±10.9
介護職の経験年数(年数)	男性 3.3±2.6
	女性 5.2±4.3
	合計 4.8±4.1
介護職場における看取り経験(人数)	あり 48
	なし 56
家族や身内における看取り経験(人数)	あり 44
	なし 60
死に関する教育を受けた経験(人数)	あり 25
	なし 79
福祉に関する資格(人数)	あり 43
	なし 64

## 2. 死生観の検討

死生観尺度と年齢及び介護職の経験年数との相関分析、また、性別、介護職場における看取り経験の有無、家族や身内における看取り経験の有無、死に関する教育を受けた経験の有無、福祉に関する資格の有無における t 検定を行った。その結果、年齢、家族や身内における看取り経験の有無、福祉に関する資格の有無においてのみ有意な相関または有意差がみられた。それらの結果を表 2 に示す。

表2 死生観と年齢、家族や身内における看取り経験の有無、福祉に関する資格の有無との相関係数及び有意差

	年齢	家族や身内における看取り経験			福祉に関する資格		
		あり(平均値)	なし(平均値)	t値	あり(平均値)	なし(平均値)	t値
死後の世界観	.10	17.1	19.1	-1.72 †	18.0	18.3	0.23
死への恐怖・不安	-.08	12.4	15.8	-3.39 **	14.3	14.2	-0.03
解放としての死	-.05	12.9	12.5	0.352	13.6	11.8	-1.66 †
死からの回避	.07	10.1	11.7	-1.66 †	12.0	10.1	-2.09 *
人生における目的意識	.29 **	9.9	10.6	-0.75	10.2	10.3	0.14
死への関心	-.05	13.9	12.7	1.239	13.7	12.8	-0.89
寿命観	.26 **	11.8	11.4	0.336	12.5	11.0	-1.40

\*\*p<.01 †p<.10

年齢と「人生における目的意識」及び「寿命観」には正の相関がみられた。家族や身内における看取り経験の有無について、「死後の世界観」と「死からの回避」に有意傾向の差がみられ、看取り経験がないほうが死後の世界観を強く持っており、また、死について考えないようにしているという傾向が示された。そして、「死への恐怖・不安」に有意差が示され、看取り経験がないほうが有意に死への恐怖・不安を持っていることが示された。福祉に関する資格の有無について、「解放としての死」に有意傾向の差がみられ、福祉に関する資格を持っているほうが死を苦しみからの解放だと捉えている傾向があることが示された。また、「死からの回避」に有意差が示され、福祉に関する資格を持っているほうが有意に死について考えないようにしていることが示された。

そこで、年齢に関して、30 代以下群 (79 名) と 40 代以上群 (28 名) に分類し、死生観、介護職場における看取り経験の有無、家族や身内における看取り経験の有無、死に関する教育を受けた経験の有無、福祉に関する資格の有無における t 検定を行った。結果を表 3 に示す。

「人生における目的意識」及び「寿命観」に有意差がみられ、40 代以上のほうが人生に目的があると、また、寿命は決められていると有意に強く思っていることが示された。また、家族や身内における看取り経験の有無について有意差がみられ、40 代のほうが有意に家族や身内の看取り経験をしていることが示され、死に関する教育を受けた経験の有無に有意傾向がみられ、40 代以上のほうが有意に死に関する教育を受けていないことが示された。

表3 30代以下と40代以上におけるt検定結果

	30代以下(平均値)	40代以上(平均値)	t値
死後の世界観	17.8	19.0	-0.934
死への恐怖・不安	14.4	13.8	0.530
解放としての死	12.6	12.4	0.161
死からの回避	10.5	12.1	-1.447
人生における目的意識	9.6	12.3	-3.037 **
死への関心	13.2	13.2	-0.005
寿命観	10.7	14.3	-3.159 **
介護職の経験年数(年数)	4.6	5.5	-0.970
介護職場における看取り経験	1.5	1.6	-0.651
家族や身内における看取り経験	1.6	1.4	2.096 *
死に関する教育を受けた経験	1.7	1.9	-1.933 †
福祉に関する資格	0.4	0.5	-1.507

\*\*p&lt;.01 \*p&lt;.05 †p&lt;.10

## 参考文献

厚生統計協会 2004 人口と世帯 国民の福祉の動向・厚生指標, 51, 4-12

政府統計 2009 死亡の場所別にみた年次別死亡数

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001057775>

平川仁尚・葛谷雅文・加藤利章・植村和正 2008 介護老人保健施設1施設における看護・介護職員の終末期ケアに関する意識と死生観. ホスピスケアと在宅ケア, 16, 16-21

広井良典 2005 死と向き合う介護—超高齢化時代の死生観とターミナルケア—. 介護福祉, 58, 21-34

早坂寿美 2010 介護職員の死生観と看取り後の悲嘆心理—看護師との比較から—. 北海道文教大学研究紀要, 34, 25-32

牧 洋子・石井京子・野村和子 2006 特別養護老人ホームにおけるケアワーカーの死生観の分析結果について 日本福祉大学社会福祉論集, 115, 113-128

榊原和子・中家洋子 2008 高齢者の看取りに関する介護福祉士教育の課題. 四條畷学園短期大学紀要, 41, 1-8

早瀬圭一・岡田 猛・門森道子・島崎たか子・半田タユ子 2007 高齢者施設職員調査報告—特別養護老人ホームにおける諸問題と職員の死生観—. 死生学年報 2007, 155-182

平井 啓・坂口幸弘・安部幸志・森川優子・柏木哲夫 2000 死生観に関する研究—死生観尺度の構成と信頼性・妥当性—. 死の臨床, 23, 71-76